

ガラテヤの信徒への手紙 3 章 25 節～4 章 31 節

2020 年 2 月 27 日

古本 靖久

1、聖歌 312 番 「神あめつちを 造りたもう日」

2、お祈り

3、今日の内容

熱心なファリサイ派であったパウロは、もともと教会やキリスト者を迫害していました。ステファノの殺害にも賛成し、その場面にもいました。しかしダマスコでの出来事をきっかけにパウロは回心し、福音を伝えていきます。ガラテヤはパウロが伝道旅行の際に、訪れた場所の一つです。

ところがパウロの耳に、ガラテヤの人たちの心が乱されているという話が聞こえてきます。そこでパウロは、ガラテヤの教会の信徒に向けて、手紙を書くことにします。これが今、わたしたちが聖書で目にすることができる「ガラテヤの信徒への手紙」です。

導入	1 : 1～5	挨拶
	1 : 6～9	異なる福音
福音の啓示	1 : 10～12	神から示された福音
	1 : 13～24	啓示の前後
	2 : 1～10	エルサレム使徒会議
	2 : 11～14	ケファ(ペトロ)批判
	2 : 15～21	信仰による義
福音の真理	3 : 1～5	信仰と霊の受容
	3 : 6～14	信仰と祝福
	3 : 15～24	律法と約束
	3 : 25～4 : 7	約束の相続者
	4 : 8～20	パウロの受容
福音の自由	4 : 21～31	二つの契約のたとえ
	5 : 1～15	キリストの自由
	5 : 16～26	自由と愛
結語	6 : 1～10	霊の実
	6 : 11～18	まとめ

パウロはまず、自分は神さまによって使徒とされたことを強調します。それはガラテヤの人たちを惑わす人たちが、パウロはエルサレムの共同体では指導者として認められていないと言っていたからかもしれません。それ以上にガラテヤの人たちを惑わしたのは、「ほかの福音」というものでした。他の福音といっても、別に何かあるわけではなく、パウロが伝えた福音とは全く違うものでした。それは割礼を施したり律法を守ったりすることによって救われるというものだったのです。

このページは前回までと一緒の内容です。今月も「福音の真理」を学んでいきましょう。

4、段落ごとに

◆約束の相続者（3：25～4：7）

①聖書輪読（346 ページ）

②語句の意味

- 3:25 **養育係**（裕福な）家の子ども（6～16 歳くらい）をしつける責任があった。多くは奴隷か解放奴隷の役目だった。
- 3:27 **洗礼を受けて** 人が新しく造られ、神の家族の一員になることを示すため、洗礼には水が用いられる。洗礼はキリストと共に死んで葬られることを意味する。罪の奴隷だった古い命は死に、新しい人が生まれる。
- 3:29 **アブラハムの子孫** 神がアブラハムを選んだので、アブラハムの子孫は皆、神の子であると信じられていた。
- 4:2 **後見人や管理人の監督の下に** ローマの法とその慣習が言及されている。後見人には、子どもが 14 歳になるまで世話をする責任があった。後見人や管理人は、一般に青年が 25 歳になるまで財産を管理した。律法を、後見人や管理人にパウロはたとえている。
- 4:3 **世を支配する諸霊** キリスト者になる前の人の考えや行動を支配した様々な信念のこと。このギリシア語の元々の意味は、宇宙の万物を構成する基本的な構成要素のこと。宇宙の諸力という訳もある。
- 4:4 **女から…律法の下に生まれた者** イエスはユダヤ人女性マリアの息子で、ユダヤ人として律法に従った。
- 4:6 **アッバ、父よ** ギリシア語の「父」の語の前に、アラム語（アッバ）がある。アッバは「わたしのお父さん」を意味する親しみを込めた表現。

③解説

ここでパウロは、神さまの救いのみ業が全人類に及ぶことを告げます。まず「**信仰が現れ** (3:25)」ます。前回の 3 章 23 節にも「信仰が現れる」という表現がありました。信仰と聞くと、人間が神さまに対して持つものというイメージを抱きます。

しかしここを「人間の持つ信仰」だと解釈してしまったら、自分たちの力で神さまの救いを得たという間違った解釈に陥ることになります。信仰は「信」や「信頼性」とも訳され、神さまの人間に対する思いを、「信仰が現れた」と表現しているのです。

前月述べたように、「養育係」である律法の文字通りの役割は、イエス様の十字架によって終わりました。律法によって、わたしたちは自分の罪深さに気づかされます。それが律法の役目です。そしてイエス様の十字架によって罪を贖ってもらわなければならない、自分を知るのです。

「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。(3:26)」という文もこういう意味です。「神さまが信頼されたことにより、キリスト・イエスを通して神の子なのだ」。神さまの思い(み心)によって、わたしたちは子とされるのです。

神さまはアブラハムと契約を結びました。この契約によって、アブラハムの子孫に神さまは祝福を与えます。アブラハムの子孫は神さまに属する民、つまり神の子と言えます。ではガラテヤの人たちはどうして神の子だと言えるのでしょうか。

それは「洗礼を受けてキリストに結ばれ(3:27)」、「キリストを着ている(3:27)」からです。神さまの前に立つことのできない立場から、立つことのできる立場になることを、聖書はしばしば「着衣行為」を通してたとえています。「救いの衣」や「晴着を着せてもらいなさい」という表現、あるいは司祭が着る祭服にも通じるものがあります。

わたしたちが変えられるのではなく、変わらないといけないわけでもない。上からスッポリ上着をかぶせられるように「キリストを着る」のです。どんな人であろうとも、洗礼によって同じようにキリストを着ることができる。だから「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女も(3:28)」ないのです。

パウロはしばしば、神の共同体を「体」として表現します。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。(一コリ 10:17)」、「わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。(ローマ 12:5)」などがあげられますが、その中には様々な人が含まれていることも覚えておきたいと思います。

神さまはユダヤ人を、「相続人(4:1)」としていました。これはアブラハムとの契約によって定められたことです。しかし「時が満ち(4:4)」て、イエス様が現れるまでは、「未成年(4:1,3)」であったユダヤ人は、「後見人や管理人(4:2)」である律法の監督の下、養育されていました。

また「世を支配する諸霊に奴隷として仕えて(4:3)」いた異邦人も、「贖い出し(4:5)」、「神の子となさるため(4:5)」に、イエス様を遣わしてくださったとパウロは書きます。そのことによって、彼らは「奴隷ではなく、子(4:7)」とされ、「神によって立てられた相続人(4:7)」となるのです。

<ここまでの箇所から>

パウロはここで、すべての人に神さまの恵みが与えられることを伝えます。わたしたちもその中に含まれています。神さまはある民族だけを選んだわけでも、正しい人だけを選んだわけでもありませんでした。どんな人でも「キリストを着る」ことによって、神さまの子となり、「アッバ、父よ」と叫ぶことが許されるのです。

◆パウロの受容（4：8～20）

①聖書輪読（347 ページ）

②語句の意味

- 4:8 **もともと神でない神々** パウロは偽りの神か、あるいは世を支配する諸霊の力について言及していると思われる。
- 4:9 **神から知られている** ガラテヤの人々がキリスト者になったのは、神が特別な愛から彼らを選んで召し出し、ご自分を知らせたからであるという意味。
- 4:10 **いろいろな日、月、時節、年などを守っています** ガラテヤの人たちはユダヤ人の影響を受けて、新月祭、過越の祭、五旬祭などのユダヤの祝日や断食に関する規定を守り始めていた。
- 4:13 **体が弱くなったこと** 第二回宣教旅行のとき、病気のためガラテヤ滞在が長引き、病気回復までの間、最初の計画よりも宣教活動が長くなったことを指しているかもしれない。ガラテヤは高原で涼しかったので、衰弱したパウロはしばらく病気が癒えるのを待ったのかもしれない。
- 4:14 **忌み嫌ったり** 唾を吐きかけるという意味。魔術行為に対する防御策としても用いられる。
- 4:14-15 **わたしの身には…自分の目をえぐり出しても** パウロが初めてガラテヤを訪れたとき、何らかの持病があったと考えられる。
- 4:15 **自分の目をえぐり出しても** パウロはこのとき、視力が衰退していたのだろう。
- 4:16 **あなたがたの敵となった** 律法を重視しているユダヤ人からみれば、律法不要論を説くパウロは敵だったに違いない。
- 4:17 **あの者たち** 異邦人の信徒に割礼やそれに伴うユダヤ人としての諸儀礼を受けるべきだと教え、またパウロは本当の使徒ではないと主張した人たち。つまりキリストの福音を覆そうとしている人たち(1:7)のこと。

③解説

ここででてくる「**ところで(4:8)**」という言葉は、強い語気という言葉です。パウロの言葉は9節以降、ガラテヤの信徒に対して強く迫ります。

パウロはまず、ガラテヤの人に対して「**かつて(4:8)**」の話をします。彼らは「**神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました(4:8)**」。自然や偶像、太陽や星などを拝んでいたということでしょう。それが「**今は神を知っている、いや、むしろ神から知られている(4:9)**」にもかかわらず、その祝福から離れようとしていることに、パウロは失望します。**神さま自らが、その関係性の中に人々を招き入れた**のです。それなのにあなたがたときたら、その嘆きが聞こえてくるようです。

パウロの耳には、ガリラヤの人たちが「無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしている(4:9)」ことや、「いろいろな日、月、時節、年などを守って(4:10)」いることなどが聞こえてきます。

「無力で頼りにならない支配する諸霊」とは異教の神々のことを指しているのでしょうか。旧約聖書には「バアル」という神が出てきます。また使徒言行録には、「ゼウス」や「ヘルメス」といった神の名も登場します。

そして「いろいろな日、月、時節、年」とは、新月祭や祝祭日の他、安息日や断食日などのことです。つまりユダヤ教の律法を遵守することを意味します。パウロはガラテヤの人たちが異教の信仰に戻ることはもちろんのこと、ユダヤの律法を守ることも含めて「逆戻り(4:9)」と表現しているのです。

そしてパウロは呼びかけます。「わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください(4:12)」と。パウロはもともとファリサイ派の人で、律法を遵守していました。それがあなたがた異邦人のようになったということです。つまり律法の外に生きるガラテヤの人たちようになったという意味です。

だから彼らにも同じように、律法の外で生き続ける選択をしなさいというのが、パウロの勧めです。「わたしのようになりなさい」という言葉だけを取ると、パウロが高圧的に思えるかもしれませんが。しかしパウロの宣教の姿を見たガラテヤの人にとって、この言葉はすんなりと受け入れられるものだったのではないのでしょうか。

というのも、パウロがガラテヤに来たとき、「体が弱くなったことがきっかけで(4:13)」、福音を告げ知らせたからです。感染症のリスクがあって「あなたがたにとって試練ともなるようなことがあった(4:14)」のか、視力が低下したパウロに対して「自分の目をえぐり出してもわたしに与えようとした(4:15)」のかわかりませんが、とにかく弱い自分を受け入れてくれた彼らに対し、パウロは感謝しています。

しかし、彼らは惑わされていきます。「わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます(4:19)」という言葉の背景には、イスラエルの不誠実にたびたび心を痛めてきた神さまの姿があります。「ガラテヤの信徒たちよ、もう一度神の子になれ」というパウロの熱い思いが、ここから浮かび上がります。

<ここまでの箇所から>

ボロボロになった自分を受け入れ、そして福音を受け入れたガラテヤの人たちを、パウロは愛してやまなかったことでしょうか。この姿は、わたしたちが今まで抱えてきたパウロ像に新たな視点を与えてくれるのかもしれませんが。

◆二つの契約のたとえ（4：21～31）

①聖書輪読（348 ページ）

②語句の意味

- 4:22 **アブラハムには二人の息子があり** アブラハムは妻サラによって息子が持てるとは思っていなかったため、彼はサラの奴隷のハガルによって最初の息子をもうけた。ハガルの息子はイシュマエルと名付けられた（創 16:1-16）。後にアブラハムとサラはイサクという名の子をもうけた。イサクは神が約束した子として、その子孫はイスラエルの民となった。
- 4:24 **別の意味** 比喩として理解すること。つまり文字通りの意味ではないこと。
- 4:24 **二つの契約** 一つは、ハガルに象徴されるシナイ山での契約、もう一つは明確には説明されていないが、自由の女（サラ）に象徴される契約で、アブラハムに与えられキリストにおいて成就した契約のこと。
- 4:27 **不妊の女** サラには老年になるまで子どもが生まれなかったことを指す。

③解説

パウロはここから、二人の母を登場させます。ここに出てくるサラとハガルという女性は、創世記 16～17 章のアブラハムの相続物語の中に登場します。

パウロは最初に「**あなたがたは、律法の言うことに耳を貸さないのですか(4:21)**」と問いかけます。普通律法というと、モーセ五書（創・出・レビ・民・申）を指しますが、後から引用されている箇所はイザヤ書ですので、旧約聖書全体を指しているようです。

創世記には、「**アブラハムには二人の息子があり、一人は女奴隷から生まれ、もう一人は自由な身の女から生まれた(4:22)**」という物語が書かれています。「女奴隷」とはハガルのことで、正確には「自由な身の女」サラの奴隷でした。聖書には女性に奴隷がつくことは珍しくなく、ヤコブの妻レアとラケルにもそれぞれ奴隷がいました。

サラは高齢になっても子がうまれなかったため、自分の奴隷であるハガルを側女として夫アブラハムのもとに仕えさせます。そして生まれた子どもがイシュマエルでした。しかし**彼は女奴隷の子であったので、奴隷という身分を引き継いでいきます。**

パウロはもう一度、「**女奴隷の子は肉によって生まれたのに対し、自由な女から生まれた子は約束によって生まれたのでした(4:23)**」と書いて、2 組の母子の対比を強調させます。最初の子であるイシュマエルは、「肉によって生まれた」と書かれます。「肉」には否定的なニュアンスが含まれており、パウロは「肉」をこの時代に属するものの象徴として捉え、また神さまに対する不誠実という意味で用います。

したがって「肉によって」ということは、サラの子イサクを通して諸国民に祝福が及ぶという神さまの約束に対する信頼性の欠如だということが言えます。さらに割礼は「肉に記された永遠の契約の象徴」なので、「肉によって生まれた」子と割礼者をも同一視しています。

一方女奴隷に対し、「自由な女」であるサラから生まれた子であるイサクは、アブラハムに対する神さまの約束のもとに生まれました。これが二つの契約を表しています。

シナイ山は律法がモーセに授与された場所です。この場所がアラビア語で「ハグラ」と呼ばれていたこと、あるいはシナイ山がハガルの出身地エジプトに近いアラビアに位置することなどから、「子を奴隷の身分に産む方は、シナイ山に由来する契約を表していて、これがハガルです(4:24)」とパウロは説明します。

さらに律法とシナイ山が結びつくことから、奴隷であるハガルと、「律法の呪い」のもとにいる「今のエルサレム」が結び付けられる。つまり「今のエルサレム」は奴隷状態なのだというのです。この対比を表にしてみました。

パウロの福音 キリストによる契約の祝福	反対者の福音 律法による契約の祝福
自由な身の女 (22、26、30、31)	女奴隷 (22、25、30、31)
約束の子 (23)、霊の子 (29)	肉によって生まれた子 (23、29)
わたしたちの母 (26)	ハガル (24、25)
	アラビアのシナイ山 (24、25)
天のエルサレム (26)	今のエルサレム (25)
イサク (28)、自由な身の女から生まれた子 (30、31)	女奴隷から生まれた子 (30、31)

パウロはこのたとえを通して、次のことを伝えます。それはサラと本来血縁関係にあったはずのユダヤ人一般がハガルの子孫となり、むしろサラとの血縁関係にない異邦人がサラの子孫となるということです。これは驚くべき逆転です。「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」というイエス様の言葉を思い起こします。

「あ のとき、肉によって生まれた者が、“霊”によって生まれた者を迫害したように(4:29)」
 というのは、イシュマエルがイサクをからかった場面でしょうか。迫害とまではいえないかもしれませんが、ユダヤ伝承の中にはイシュマエルの攻撃性を強調したものもあります。

しかし聖書は、「女奴隷とその子を追い出せ(4:30)」と書きます。これは排他的なことを強調しているのではなく、約束の子らはしばらく迫害にあうが、最終的には祝福に至るという希望を告げようとしているのです。

子に恵まれないサラの苦しみが喜びへと変わった逆転現象は、迫害を受けたイサクが祝福を受けるといふ逆転現象に引き継がれ、それはガラテヤの信徒にも引き継がれていくのです。

<今日の箇所から>

パウロが語る「逆転現象」は、わたしたちの耳にはどう聞こえるでしょうか。イエス様は山上の説教で語られました。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

これらの宣言も、ある意味「逆転現象」だと言えると思います。神さまはそのように、わたしたちに関わってください。そのメッセージをわたしたちは心から喜びたいと思います。

今回の学びは、これで終わります。次回は3月26日(木)10時30分～で、「福音の自由(ガラテヤ5:1～6:10)」について学んでいきたいと思ひます。